

# 古代インド史と仏教

男のゆうゆう塾 吉田俊夫

## 初めに

1 2月14日のゆうゆう塾の講座「古代インド史と仏教」の概要です。私が説明下手なのと持ち時間が短いので、前もって皆様に概要をお読みいただき、講座内容のご理解の一助にさせていただければ幸いです。なお「§9 ブッダはなにを説いたか」は重要なので全文を載せています。

## §1 農耕の始まりと都市国家の誕生

古代インド史に入る前に農耕の始まりと都市の誕生について簡単におさらいします。

1. 今から1万5000年ほど前に氷河期が終わり、1万年ほど前から現在とほぼ同じ温暖な気候の時代が始まった。
2. 紀元前9000～8000年前豊かな三日月地帯で農耕が始まった。
3. 紀元前5000年頃チグリス・ユーフラテスの下流地帯に進出し、神殿を中心に多くの村落をつくった。
4. 紀元前3000年紀の初めになると、神殿を中心に急速に人口が集中し、周辺の村落が消えて、城壁をもった都市が成立した。

## §2 インドの地勢

インド亜大陸には現在インド、パキスタン、バングラデシュ、ネパール、ブータン、スリランカ、モルジブの7か国があり、総面積は440万km<sup>2</sup>です。これは欧州連合（EU）の432万km<sup>2</sup>に匹敵する面積です。インド亜大陸全体を統一した王朝はほとんどありません。常に多くの王朝に分裂していましたが、それらの王朝もフランスやドイツほどの大きさを持っており、インド亜大陸全体が常に混乱していたわけではありません。

## §3 先インダス文明

インドの古代文明と言えばインダス文明が有名だが、近年の遺跡の調査研究から、インドにおける農耕の始まりは、インダス文明（BC2600～BC1800）が成立するよりはるかに古く、BC7000年頃までさかのぼることが明らかになっている。これらの遺跡からは栽培種の小麦・大麦と家畜化された羊、山羊、牛の骨が出土している。この農耕がインダス各地に広まり、各地に農耕村落を成立させる。そしてBC2600年頃、各地域の村落を糾合する形でインダス文明が成立する。

## §4 インダス文明（BC2600～BC1800頃）

世界四大文明のひとつインダス文明は今日のパキスタンの大半とインドの西北部を含む広大な範囲に及んでいる。遺跡の分布はインダス川の流域を中心に展開している。

この地域の気候環境は、年間降雨量100mm～500mm程度であり、全体として半乾燥地帯となる。その自然環境は灌木がまばらに生えている植生である。

農耕はインダス川が毎年繰り返す氾濫を利用した。

代表的な都市としては、ハラッパー、モヘンジョ・ダロ、ドーラビーラー等がある。

これらの諸都市はいずれも河川や内湾に面してつくられており、都市間の人や物資の移動には、水上交通が重要な役割を持っていたことを示している。

都市遺跡は城塞と市街地とに区分されていることを特徴とする。

城塞とは、都市の政治的宗教的中心の区域であり、基壇を設け市街地よりも数メートル高く造

られており、その上に公共建造物が建てられていた。市街地は商・工業・住居などが展開する区域である。

インダス文明の都市遺跡からは、強大な権力を持った専制君主の存在を示す遺物が発見されない。大規模な墓、巨大な宮殿、神殿、王墓、戦勝記念碑などに相当するものは見つからない。また、都市全体を守る壁は低く、武器類も貧弱で軍事的に強力な王権が存在したようには見えない。

しかしながら、モヘンジョ・ダロは幾回か大洪水にあっており、その都度全く同じところにそっくり同じように再建されている。そのようなことができるためには、ある種の権力の存在が想像され、それは宗教的なものであらうと考えられている。しかし詳細は不明である。

インダス文明の諸都市は、紀元前1800年頃から衰退をはじめ、200～300年後に消滅した。

インダス文明滅亡の原因として、アーリア人のインド侵入、大洪水、環境破壊などが挙げられているが、真相は不明である。

### §5 アーリア人のインドへの侵入 (BC1500頃)

紀元前2000年頃インド・ヨーロッパ語に属する言語を話し、遊牧生活を送る一団が中央アジアに移住し、牧畜の適したこの地で人口を増加させていた。

紀元前1500年頃その一部が南下を開始し、ヒンドウクシュ山脈を越えてインドに入りました。

彼らは自らをアーリア（高貴な）と称していました。



### §6 前期ヴェーダ時代 (BC1500～BC1000頃)

紀元前1500年頃インドに入ったアーリア人は、ダーサ、ダスユと呼ばれる黒色、低鼻の先住民を征服しつつ、インダス川上流のパンジャーブ（五河）地方で牧畜を主とし農業を副とする生活を始めた。

彼らは自然を神格化した多数の神々を崇拝し、祭火をたき、讃歌と供物を神々にささげた。やがて祭式を専門にとり行う司祭者も現れ、彼らの手で讃歌集「リグ・ヴェーダ」が編まれた。

当時のアーリア人の宗教は多神教であった。

それは主として自然現象あるいはその背後に存在すると想定される力を神格化して崇拝することであった。そうした神々への讃歌が集成されて成立したのが「リグ・ヴェーダ」である。



### リグ・ヴェーダの神と日本

雷神インドラ

河神サラスヴァティ

死者の国の神ヤマ

仏教世界を守護する帝釈天

知恵と弁舌と財宝の神弁財天

地獄の支配者の閻魔大王

当時の社会においては、アーリア人からなる一般自由民の階級と先住民である隸民の階級との区別があった。

階級のことをヴァルナと言う。ヴァルナとは元来「色」という意味の語であり、特に皮膚の色をさしている。

征服者たるアーリア人は皮膚の色が白く、これに反して被征服者たる先住民は色が黒かったので、皮膚の色の区別がそのまま階級の区別の標識となった。

アーリア人がパンジャーブ地方に定着した最初期の社会では、部族民は比較的平等であり隸属民との区別があっただけである。

## §7 後期ヴェーダ時代 (BC1000~BC600 頃)

アーリア人はパンジャーブ (五河) 地方で先住民との融合を進めつつ、生活の基盤を牧畜から農耕へと次第に移していった。

BC 1000 年頃そのようなアーリア人の一部がより肥沃なガンジス川流域に向けて移動を始めた。

後期ヴェーダ時代には、青銅器に代わって鉄器が用いられるようになった。鉄は初めは武器に、後には農具に用いられるようになり、ガンジス河畔の森林の開拓が可能になった。

また、鉄の刃先を持つ犁 (スキ) を牛にひかせる耕法も発達し、農業生産の増大ももたらされた。

後期ヴェーダ時代には、ガンジスとヤムナー両河地域を中心に部族王制といえる形態をとった国家が多数現れた。これらの国はいまだ部族制を脱却していなかった (王の独裁権力が確立していない) が、部族集会は力を弱め、前代のラージャン (部族長) よりはるかに強い権力を持ったラージャン (王) が登場した。

王には異部族の住民を抱え込んだ領土を支配し、そこに秩序と繁栄をもたらすことが求められた。

王の属する部族とその勢力範囲となった土地との関係も緊密になり、そうした領土はクル国、パンチャーラ国のように部族名を冠して呼ばれている。それぞれの国の王たちは領土の獲得と人民の支配を目指して戦いを繰り返した。



### 四つのヴァルナの成立

農業技術が向上し、十分な余剰生産が得られるようになると、生産に直接携わる必要のない司祭階級や王侯・武士階級の形成が促進された。そしてバラモン (祭祀を司る司祭者階級)、クシャトリア (行政・司法・軍に携わる王族武士階級)、ヴァイシャ (農耕・牧畜・商業を行う庶民階級)、シュードラ (被征服民の隸民) という四つの階級が成立した。

そして、後期ヴェーダ時代の終わり頃になると、浄・不浄の観念が発達し、排泄、血、死などに関係する行為や物が極度に不浄視されるようになった結果、それらに関わる職業に従事していた人々が、不可触民の地位に落とされたのである。

### 梵我一如と解脱

後期ヴェーダ時代も後半になると内面的な思索を重視するバラモンの思想家が現れ、真理を探究し把握することの必要性を説いた。

彼らが発達させた哲学は後期ヴェーダ文献の一つ「ウパニシャッド」の中に纏められているた

め「ウパニシャッド哲学」と呼ばれる。

ウパニシャッドの哲学者たちが探究したのは、目に見える世界の背後に存在する絶対的な原理であった。

万物がそこから生まれ最後にそこに帰るような宇宙の根本原理をブラフマン（梵）と呼んだ。

また、我々人間の根本に存在する原理を求め、それをアートマン（我）と呼んだ。

アートマンはもともと「息」後に「靈魂」の意味を持つにいたった語であるが、哲学者たちはこの語を自我の根本原理の意味に用いたのである。

彼らの説くところによれば、この梵と我の両原理が究極的に同一であると知覚するところに真理の把握があるという。

これが**梵我一如の真理**である。この真理を知覚することによって、絶対的自由としての「解脱」が得られるという。

すなわちバラモン教では、宇宙原理「ブラフマン」と個体原理「アートマン」が本質において同一であると、瞑想の中でありありと直観することを目指す。それが梵我一如の思想であり、一般的には苦行によってこれを目指す。

### **業・輪廻思想の誕生**

業・輪廻思想はインド人の死生観の根本である。この業・輪廻思想に関する体系的な説明がなされた文献は「ウパニシャッド」である。そこには「五火二道説」が説かれている。

「五火二道説」によると、靈魂は次の五段階を経て輪廻するという。五火の「火」とは祭火の意味であり、靈魂の輪廻する段階を表している。

- (1) 死者の靈魂は火葬された後月の世界に行くが
- (2) やがて雨と共に地上に下り
- (3) 地中に入って食物になり
- (4) 男に食べられてその体内に入り
- (5) 精子として母体に入り再生する

この五段階は単なる輪廻であるが、これにさらに「因果応報」の理論が加わる。

正しい信仰による完全な知識を得たものは、火葬の後神の道に入りブラフマンの世界に安住して地上に戻ることはない。

これに対して一般の人間は火葬の後、多くの祖先たちと同じ道に入り、上の五段階を経て地上に再生する。

その際どのような姿をとって再生するかは前世の行為（業）によって決まる。

祭祀や布施や善行に努めたものはバラモンやクシャトリアとして生まれ、悪を行ったものはシュードラや畜類などとして生まれる。

さらに極悪のものは祖先たちの道に入ることもなく、単に虫けらとして地上で生死を繰り返すのであるという。

この世の生まれは前世の業の結果であるから、シュードラに生まれようと、不可触民に生まれようと宿命として甘受せねばならないのである。

こうした宿命観はヴァルナ制度や後のカースト制度（ヴァルナ・ジャーティ制度）を支えることになる。

### **§8 仏教興起時代 (BC600～BC317)**

BC600年頃アーリア人はさらに東方に進出し、ガンジス川中流の諸地域に定住した。それ

により社会的・文化的に目覚ましい変動を生じた。未知の新しい土地に定住した結果、その男子は先住民族のドラヴィタ人の婦女を盛んに娶ることとなった。現代インドの民族分布状態の調査報告を見ても、純粋のアーリア人が居住しているのは主として西北インドであって、ガンジス川流域の住民はアーリオ・ドラヴィタ族という類型に入れられている。すなわちアーリア人とドラヴィタ人の混血種なのである。



(1) 混血が盛んに行われ純粋のアーリア人ではなくなり、父祖以来の伝統的な風習、儀礼、信仰をそのまま遵守しようとしなくなった。

(2) 積極的に開墾を行い、灌漑用の設備を作り、多量の農産物をつくり、彼らの物質的生活はきわめて豊かになった。

(3) 物資が豊富になると共に、しだいに商工業が発達し、多数の小都市を成立させるに至った。これらの小都市を中心に周囲の町々や村落を包括する群小国家が多数併存していた。

### 王国の強大化

群小諸国は次第に大国に併合されていき、ガンジス川の中・下流地域に専制的な王を戴く強国が台頭してくる（マガタ国、コーサラ国）。

そうした王国の官僚組織と軍隊を維持するための財源は、米の栽培を中心とする農業生産の増大と都市経済の発展による豊かな税収入によってもたらされた。

諸国の王たちは群雄割拠の時代を生き抜くために、富国強兵策を進め出身地や出身部族、時には出身ヴァルナにこだわることなく有能な者を臣下の列に加えた。

この時代になると戦車に代わり象部隊が軍の主役になった。

王国の中ではコーサラ、マガタ、ヴァツァ、アヴァンティが有力であり四大国と呼ばれた。



### ヴァルナ制度の否定

後期ヴェーダ時代に定められたヴァルナ制度（身分による職業の差別）は、マガタなどの新興の都市では守られなくなっていた。

その当時を描写したある伝典では「たとえシュードラであっても、財宝、穀物、銀、金で富むならば、クシャトリヤもバラモンもヴァイシャも彼よりも先に起き、あとに寝、いかなる仕事でも進んで勤め、彼の気に入ることを行いお世辞を言う。」と記されている。

やがてマガタの地に、バラモンの眼からはシュードラ王朝とみなされる、ナンダ朝やマウリア朝が起こり、統一国家を建設することになる。

### 新思想の誕生

ガンジス川中・下流域ではこの時代に多数の思想家が現れ、インド思想史上で最も華やかな時代を迎えた。丁度その頃中国でも同じような政治・経済・社会的な背景のもとに孔子が活躍し、



ギリシャでも同様な背景のもとにソクラテス、プラトンなどがあらわれた。

この時代に活躍したインドの思想家の間にはいくつかの共通点が存在する。

- (1) いずれもヴェーダ聖典の権威とヴェーダ祭祀の有効性を否定している
- (2) ヴァルナ差別を否定した。バラモンに特別な地位と権威を与え、思想と行動をヴァルナの枠に押し込めようとする制度は、都市で活躍する人々にとっては受け入れがたいものであった。
- (3) 思想家たちが広範囲の人々を対象に平易な言葉で教えを説いた。
- (4) いずれの思想家も個人として自己主張をし、信者たちも出身ヴァルナや出身地に関係なく個人として帰依している。生まれではなく、個人の能力、意志、行為が評価された。

### ブッダの生涯 (ブッダの生没年：BC 566頃～BC 486年頃)

仏教の開祖ガウタマ・シッダルータはヒマラヤ山麓にあったシャークヤ族の国の有力者の家に生まれた。(現在のネパールのルンビニ)

結婚して一児をもうけたが、29歳の時妻子を捨てて出家した。

#### 四門出遊の伝説

シッダルータが出家する前、まだ太子のとき、王城の東西南北の四つの門から郊外に出掛け、それぞれの門の外で、老人・病人・死者・修行者に会い、その苦しみを目のあたりに見て、人生に対する目を開き、出家を決意したという伝説。



出家したシッダルータは、六年の間苦行に専念したが満足な結果は得られなかった。そこで苦行を止め、今日のブッダガヤの地に移って菩提樹の下で静座・瞑想に入り悟りを開いた。35才の時である。

その後、ブッダはマガダ国、コーサラ国をはじめとするガンジス川中・下流域の諸国を旅してまわり、修行と教化の日々を送った。

80才になったブッダは旅の途中クシナガラで病死した。

### §9 ブッダはなにを説いたか

ブッダの覚りの内容は初転法輪にそのエッセンスがあるといわれています。

(初転法輪とはブッダが覚りを開いた後、初めて行った説法のことです。)

初転法輪では「中道」、「八正道」、「四諦」がまず説かれ、最後に「五蘊無我」が説かれたといわれています。

これらの内容について簡単にご紹介しようと思います。

ブッダは何のために出家したのでしょうか。

「四門出遊」の伝説にあるように、ガウタマ・シッダルータは人生を苦と考えるようになりました。その当時は業・輪廻転生が代表的な思想で、ガウタマも苦の人生を脱するために、出家して梵我一如の解脱を目指す苦行の道(アトマンを求める道)に入ったと思われます。時には死とすれすれの苦行を行ったガウタマですが、ついに苦行によっては解脱は得られないと覚りました。

すなわち我(アトマン)を求める道を否定し、我(アトマン)によらない「苦の滅への道」

の追及に入りました。

そして苦行を止め「苦の滅の道」について徹底的に思索と瞑想を行い、覺りを得てブツダになりました。

## 苦とは何か

仏教ではその代表として次の八苦を挙げています。

生、老、病、死

愛別離苦（あいべつりく） - 愛する者と別離すること

怨憎会苦（おんぞうえく） - 怨み憎んでいる者に会うこと

求不得苦（ぐふとくく） - 求める物が得られないこと

五蘊盛苦（ごうんじょうく） - 五蘊(人間の肉体と精神)が思うがままにならないこと

これらは皆自分の心を苦しめますが、自分ではどうにもならないものです。

## 五蘊——— 仏教での人間の定義

仏教では心の問題を扱うために、人間の肉体と精神を分析し、五蘊という表現を使います。

蘊とは集まりということで、五蘊とは人間の肉体と精神を五つの集まりに分けて示したものです。

色 肉体

受 感受作用 物事を見る、外界からの刺激を受ける「心」の機能

想 表象作用 見たものについて何事かをイメージする「心」の機能

行 意志作用 イメージしたものについて、何らかの意志判断を下す「心」の機能

識 認識作用 イメージと意志判断を総合して認識が生まれる「心」の機能

五蘊の機能を素直に見れば、我々は事物を事物として判断できるわけですが、実際は事物に対して、喜んだり、悲しんだり、愛したり、憎んだりするわけです。この原因としてブツダは人間の心の奥底に潜む「生存本能」を発見しました。そしてこれを「渴愛」または「無明」と名付けました。

これを「渴愛」と名付けたのは、のどが渴いたときにどうしても水を飲んでしまうように、凡人には制御できない欲望として現れるからです。また「無明」とはそれが凡人の心を覆っている闇だからです。

この「無明」を退治することによって、人間は本来の心を取り戻し、変化していくものを、変化していくものとして認識でき、変化していくものへの執着を離れ、苦を滅することができることを確信しました。

## 八正道

「無明」を退治する修行の方法として八正道を定め、これを「中道」と名付けました。「中道」とは、「快樂による苦の滅」でもなく、「苦行による我（アートマン）探究の道」でもないことを表しています。

① 正見 (正しいものの見方、すなわち智慧)

② 正思惟 (正しい思考の運び方、すなわち善悪の弁別や用いる論理への自覚的反省)

③ 正語 (正しいことば、すなわち嘘をついたり粗暴な言葉遣いをしないなど)

④ 正業 (正しい行い、すなわち生類を殺生しないなど)

⑤ 正命 (正しい生活規律、いわゆる戒律)

- ⑥ 正精進 (正しい努力、すなわち修行に怠りがないこと)
- ⑦ 正念 (正しい記憶、すなわち教えをしっかりと頭に刻み込むこと)
- ⑧ 正定 (正しい瞑想、すなわち徹底思考の瞑想)

<sup>したい</sup>**四諦** (諦とは「真理」という意味であり、四諦とは「4つ真理」の意)

苦の認識から始まり、苦の滅に至る正しい道程を示している教えで、八正道の修行中においても、いつも苦について振り返るための教え。

苦諦 人生は苦だという真理

集諦 苦の原因は渴愛だという真理

滅諦 苦の滅が有るという真理

道諦 八正道という苦の滅を実現する道があるという真理

### 五蘊無我

初転法輪においてブッダは弟子に対して最後に五蘊無我を説きました。五蘊無我とは、人間には我(アーマン)がないということです。これまで梵我一如を目指してきた弟子たちに対して最初から五蘊無我を説いても受け付けまいと考へ、「中道」、「八正道」、「四諦」をまず説き、心の準備ができてからこの教えを説きました。

この教えが重要なのは、あらゆるものは変化するものであり、人間の根本にも我(アーマン)のような絶対的なものはないということを徹底して教え込むことにあります。すなわちあらゆるものは変化していき、そのようなものに執着するのが無明であると覚ることによって、心の問題である苦を滅しようという教えです。

以上のようにブッダの教えは、分析的かつ明快で、現代人にも納得できる教えです。

しかし最大の欠点は、ほとんどの人がゴールに到達できないということです。なぜなら、農耕が始まって以来、我々の文明は、生存本能を刺激し、弱肉強食にによって進歩してきたからです。ですから時代が進むにつれ、凡人にはますます実現不可能な修行ということになってしまいました。

これを解決しようとして、密教、禅宗、浄土宗などの教えが説かれました。

私の家の宗教は浄土真宗ですが、内容はブッダの説いた教えとは似ても似つかぬものになっています。しかしながらブッダの教えから遠く離れている我々凡人を、いかに悟りの世界に導いていけるかを考えてくれた、先人の貴重な努力の結晶であり、重んじなければいけないと改めて思います。

最後に仏教の真髄を表しているという七仏通解偈の教えを紹介します。

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 諸悪莫作 (しょあくまくさ)   | — もろもろの悪を作すこと莫く  |
| 衆善奉行 (しゅうぜんぶぎょう) | — もろもろの善を行い      |
| 自浄其意 (じじょうごい)    | — 自ら其の意(こころ)を浄くす |
| 是諸仏教 (ぜしよぶつきょう)  | — 是がもろもろの仏の教えなり  |